

高崎学検定講座「石碑で知る高崎の歴史—群馬地域を訪ねて—」

高崎市教育委員会文化財保護課 多胡碑記念館 和田健一

はじめに

講座の目的（1）石碑は歴史の重要な史料の一つ

（2）石碑調べの利点（知的好奇心の充足、経済的、健康的、環境に配慮）

（3）地域の歴史を知る（郷土を大切に考える心の醸成）

1 石碑とは何か

（1）定義（『国史大辞典』吉川弘文館、1985）

「金石文の一つ。地誌、偉人の事績顕彰、記録、縁起、文学（詩歌）を石に刻んだものを古代では主流とする。碑の形式は必ずしも一定でないが、多くは縦長の自然石で、碑面を平滑にしそこに碑文を刻む。主体部の上方には保存と整形を兼ねて笠石をのせるものもある。材質は花崗岩・粘板岩など硬質の素材が主体で、碑文の摩損と書体の維持に留意している（以下略）」

（2）石碑の見方

①分類：板碑、五輪塔、宝篋印（ほうきょういん）塔、供養塔、道祖神塔、庚申塔、石宮、道標（しるべ）、手洗石、鳥居（石製）、常夜塔（石灯籠）、狛犬、石仏（地藏菩薩、薬師如来など）、墓碑（筆子塚）、顕彰碑、文学碑（句碑、歌碑、詩碑等…）

②形状：板状、角柱状等に整形したもの、自然石を調整したもの

③石材：多くは地元産の石を活用

西毛地域 ○安山岩、花崗岩、砂岩、凝灰岩、片岩（多い）

△玄武岩、チャート、礫岩（ほとんど見られない）

④寸法：大型は建立時の資金が豊富（資産家、多数の資金提供者）

⑤碑文：a表題「梵字＝種字（仏）」「○○供養塔」「庚申塔」「道祖神」「道陸神」

「○○先生顕彰碑」「（句）翁塚」など

b建立者（施主、個人・団体）「（個人名）」「（個人連名）」「氏子中」「○村中」

「門人中」「門弟中」「○○社中」「○○庵」

c年代「和暦○年」「和暦○（十千十二支）」「和暦○天」

月日、季節、晦日、吉日

d内容 建立の目的

e書体 楷書、隸書、篆書（表題／題額）、行書、草書

（デザイン上の観点のほか、石材の固さが書体に影響することもある）

fその他 落款（近代以降）、石工名（高遠藩領の職人名など）

⑥場所：石碑にとって意味のある場所に設置

石碑建立の意図をさぐる有力な手がかり

（ただし原位置から移動している場合がある）

⑦その他：完形か改変されているか（台石の追加、各部の交換の可能性）

2 研究史

(1) 近世

- ・文化人などによる記録 紀行文、随筆、建立に関する史料（記念句集）等
市河寛斎『金石私志』

(2) 近代

- ・史蹟名勝天然記念物保存法の成立、郡誌（史）の編纂、「上毛及び上毛人」刊行
相川龍雄、関亀齡（きれい）、土屋補三郎（老平）、豊国覚堂、松田鑽（たまき）
丸山瓦全

(3) 現代

- ・県史など自治体誌の編纂、カメラの普及、デジタルカメラの発達
研究者の活躍 大塚省悟氏、本多夏彦氏、近藤章氏、小池末廣氏、中村茂氏
濱口富士雄氏

3 群馬地域の石碑紹介

(1) 地域に関する石碑

①三ツ寺堤の碑（高崎市三ツ寺町 三ツ寺公園内）

三ツ寺堤	この地方の土地は 保水力がなく 水利にも恵まれず 日照りでの凶作に苦勞していた このため唐沢川と中島川の落ち合うこの地点に 慶安二（一六四九）年 安藤対馬守の計らいにより 領内の農民多数動員し（中略）初め 西北部からの唐沢川北の中島川からの流入によって貯水されていたが築堤後三十八年目の貞享二（一六八五）年 池底に堆積した土砂を運び出した り 拡張のための工事が一日千人で二十一日間行なわれた そのため池敷は一町一反（一・一 ha）余となり 貯水量も増し灌漑地域は 三ツ寺 棟高 中泉の三か村となり灌漑面積も二十町三反（二十・三 ha）余となった（中略）
また 当時の溜池敷は一町八反（一・八 ha）余で 灌漑面積は三十五町（三十五 ha）と拡大していた	明治―大正―昭和にかけて 桜やつつじが植えられ 風光明媚な堤として賑わった 地元の人たちの手によって整備管理が行き届き 各所にベンチが設けられ 池にボートも浮べられ 村人の憩いの場となっていた しかし戦時中の物不足の際 池端の桜や老松は伐採され 集う人々も減少した 戦後 昭和二十七年から昭和六十三年の間 堤の維持管理費を生み出すため 養鯉業者に貸し出されていた この間も池の石積 取水口等の灌漑用水池としての改善工事や憩いの場としての東屋の築造 植栽等の工事が実施された

群馬町

②庚申塔

【庚申信仰】

道教に説く「三尸」（さんし）説を母体とする民間信仰で、8世紀後半頃には日本列島に伝えられたとされる。庚申信仰が一般庶民に広まると、各地に信仰の集まり「庚申講」が結ばれ、供養を目的とした庚申塔が建てられた。

【庚申塔】形 状：石宮、板碑形、舟形、角柱形など、
青面金剛像、三猿
文字塔：「庚申」「庚申塔」「〇〇庚申供養塔」
「青面金剛」「猿田彦大神」
紀年銘：庚申年（寛政12年／1800、
万延元年／1860、大正9年／1920年）
建立のことが多い
設置場所：街道、辻など村境（魔除け）

その他の一石百庚申：北原町、棟高町（観音寺周辺）
百庚申：西国分町、足門町（原位置から移転）
などに所在

・一石百庚申（高崎市三ツ寺町）
正面 青面王（篆書体）
周囲に様々な書体で「庚申」を99か所
刻む（「青面王」と合わせて100か所）
側面 嘉永七年歳在甲寅／霜月穀旦建之
背面 願主／當村中

③養蚕信仰の碑

・蠶靈（さんれい）神之碑
（高崎市三ツ寺町 諏訪神社）
正面 正三位子爵白川資訓書（落款）
源朝臣 資訓書
※染筆者（碑文を書いた人）の白川資訓（すけのり、
一八四一〜一九〇六）は、朝廷の神祇伯、維新政府の
神祇官に出仕した。
なお白川伯王家は、花山天皇の皇孫にはじまる神祇
官を務めた公家・華族で、皇室の祭祀を司った。

・蠶影太碑（高崎市西国分町 熊野神社）
正面 蠶影太神／保岡亮吉書
背面 明治廿六年三月／西国分村中
※染筆者の保岡亮吉（鳳鳴、ほうめい）の祖父・嶺南
（れいなん）は、前橋（川越）藩の儒者で、同藩版
『日本外史』校訂者として知られる。
父・眠軒（みんけん）も学問に秀で、幕府の儒官・
林家の門人となり、川越藩校「博諭堂」教授を勤め、
慶応三年（一八六七）に前橋城が再建されたことに伴
い、同藩小参事となった。
亮吉自身も漢学への教養が高く、群馬県師範（群馬
大学前身）等で教鞭をとり、その後「鳳鳴義塾」「集
成学館」など私塾で教え、明治大正期の教育界で活躍
した。

※なお、上記の左の蠶靈神之碑の背面には、明治23年（1890）に大霜害により桑が全滅し、多くの蚕が死んだことを供養するためと記されている。右の蠶影太碑の碑も同年の建立であることから、同様の理由で建てられたことが考えられる。

④眞鹽紋彌（ましおもんや）翁之碑（高崎市三ツ寺町 諏訪神社近傍）

眞鹽紋彌（天保9～明治44年／1838～1911）は、明治13年（1880）に勃発した中野（大野）秣場（まぐさば）騒動の指導者の一人である。騒動は、近世まで共同の秣場（草、枝、薪などを採集する共有地）であった地に、県が利用の制限をかけたことが発端となった。同年10月15日、札下63か村（連合村）を中心に、榛名白川河原に不満を持った約5000人が集結したとされる。翌年、惣代の紋彌が罪に問われ収監された。

紋彌は稲荷台村出身で、江戸の成島柳北（りゅうほく）に学び、帰郷後に三ツ寺村で漢学塾「芳叢書院塾」を開いた。騒動後3年間の懲役を終えた紋彌は、多野郡三波川村（藤岡市三波川）へ移住して没す。大正2年（1913）の三回忌に「眞鹽紋彌翁之碑」が建立された。

・枉冤旌表（おうえんせいひょう）碑（高崎市下小島町）

元和3年（1617）正月4日夜、高崎藩主松平丹波守（松平康長、1562～1633）の統治に抵抗してその検見役人を撲殺した報復として、同藩が1か村全村民を殺戮したという。この年に康長は、信濃国松本藩7万石に転封となるも、近世においては当該事件を「首塚」として伝承することしかできず、明治期になり、碑を建てて広く周知するようになった。同碑末尾には「六拾四翁狂醉眞鹽寛并撰」とある。

(2) 顕彰碑

⑤深井清雄碑（高崎市棟高町 観音寺）

深井清雄は観音寺住持（修験）で近在の胸形神社別当を兼務し、維新後は祠掌兼教導職、次いで少講義となった。学問のほか書画・和歌・挿花に通じていたが50歳で没する。

同碑篆額の土方久元（ひさもと、天保4年～大正7年／1833～1918）は、旧土佐藩士で土佐勤皇党に参加、薩長同盟に関わった。維新後は天皇親政派として大日本帝国憲法制定に関わり、主に宮内大臣を務めて伯爵となっている。

同碑染筆書の金井之恭（ゆきやす、金洞、天保4～明治40年／1833～1907）は、佐位郡島村（伊勢崎市境島村）の画家・金井烏洲（うじゅう）の第4子として生まれた。幼少期は父の烏洲、青年期は中沢雪城（せつじょう）に書法を学んだが、倒幕運動に加担した新田官軍に関係して岩鼻代官所に投獄された。戊辰戦争で官軍に救出され、維新後は新政府に仕え、後に元老院議員、貴族院議員を歴任した（享年75）。

※新井守村（幕末維新期の国学者）

高井東一・狩野俊房・青木頭雄は神職

・深井清雄碑（高崎市棟高町 観音寺）

正面 少講義君深井君墓碣（篆額）
宮内大臣從二位勲一等子爵土方久元篆額

明治十九年七月六日胸形神社祠掌兼少講義深井君没於上野群馬郡棟高村私第君諱京郷字清雄號君道深井其姓（中略）
明治廿一年七月／宮内文學從五位勲六等川田剛撰
元老院議官從四位勲四等金井之恭書／廣群鶴刻字

背面（順不同）（北甘楽）新居守村（もりむら）、保坂正義、（西群馬）高井東一、狩野利房、青木頭雄、神保雪居、（三雅遠州流挿花）五大庵一米、（客席）（三ツ寺）平田九平次、眞鹽紋彌、（補助）志村彪三ほか發起世話人二三九人が連名

・入野碑（高崎市吉井町黒熊 浅間神社奥の山頂）

明治22年（1889）に多胡郡9か村（多比良・黒熊・小串・石神・深沢・中島・馬庭・小暮・岩井）が合併して「入野村」となったことを記念して建てたものである。『万葉集』『新続古今集』『夫木集』より「多胡の入野」を詠んだ和歌が刻まれている。

篆額は九条道孝（みちたか）、撰文・書は金井之恭である（高崎市指定史跡）。「我が恋はまさかも悲し草枕（くさまくら） 多胡の入野のおくもかなしも」（『万葉集東歌』）

⑥植木邦房翁之碑（高崎市棟高町 観音寺）

植木邦房（文久3～昭和9年／1863～1934）は、坂本権市豊春に和算を学び、関流の免許を受けた。その後、家塾を開き、多くの子弟を教育したほか、群馬郡会議員などを務めた。

篆額の二荒（ふたらい）徳（芳徳、明治19～昭和42年／1886～1967）は政治家で、旧伊予国宇和島藩主・伊達宗徳の子で、伯爵の二荒芳之の養子となった。

染筆者の三島通陽（みちはる、明治30～昭和40年／1897～1965）は小説家、劇作家、演劇評論家である。

※木暮武太夫・竹腰徳三は群馬郡の政治家

・植木邦房之碑（高崎市棟高町 観音寺）
正面 關流九傳算家／植木邦房翁之碑（篆額）
伯爵 二荒徳 篆額
子爵 三島通陽敬書
背面（順不同）特別賛助員 衆議院議員 木暮武太夫、縣會議員 竹腰徳三、堤ヶ岡村長
田中喜善治、門人・世話人・発起世話人等二二人が連名
昭和九年四月十五日建之／石築四代／竹望齋一舜／石工／富澤金太郎

⑦豆腐來由碑

「上毛足門」（当時は群馬郡金古町に属す）にて豆腐生産業に従事していた者が、豆腐の起源と由来を調べた。その結果、前漢の劉安（Bc179～122、高祖劉邦の孫）と、岡部治部右衛門（豊臣秀吉のもと、文禄の役の際に兵糧奉行として従軍したという）に感謝の念をこめて、豆腐を称賛した石碑である。

・豆腐來由碑（高崎市棟高町 観音寺）正面
無貴賤富貧別等上食膳特佛家齊食不可缺者爲豆腐豆腐者性潔白方正而味淡泊是以人愛好之乎温其始漢淮南王劉安好老莊喜神仙遂創製此物廣行於天下後入朝鮮而我國未之有也文禄役兵站司令岡部治部右衛門者傳其法初製之於泉之界津駿之岡部後溥及全國云其製於界津者始附紅葉圖是由買用與紅葉國音相近祝多賣也或曰界之海櫻鯛爲名產對櫻花以紅葉耳余憶無兼用此兩說者歟而有臚錦湊奴湯水茶六條春駒雲掛鶴擬等之異者唯殊調理也耳原料既富滋養而去滓渣則其效果大而需要亦多矣故業之者往々有積巨萬之富者飯嶋君韋負上毛足門人夙以其製造爲業一日歎曰吾依此物而衣食生育兒女然不知其來由可乎乃質之識者悉詳其本末再曰今與吾同業者者四海何限能明知之者果幾人耶吾勒之貞石以表報始之意乃來請文余嘉其志敘其所語且銘之曰
偉哉淮南 設心維仁 剏製新物 以利後人 文禄之役
策有副勲 索搜土宜 垂惠生民 從是邦家 溥及其方
皓々玉質 上膳佑觴 花晨月夕 輔興不荒 棒筋報謝
長仰劉岡
昭和二年歲次丁卯梅雨月 東谷隱士 田村理 篆額撰文并書

⑧松田易直碑（高崎市北原町 神明宮近傍）

松田易直（琴堂、文化 6～明治 14 年／1809～81）は、群馬郡北原村の人で覚法寺（高崎城下嘉多町）角田惠聖について学んだ。普段は農業に精を出しながら地域の子どもたちに学問を教えた。後年には近隣「五十三邨總代」となり、郷土の発展に尽くした。碑文は易直の事績について述べたもので、篆額は前出の土方久元、撰文は三島毅（中洲、東京帝国大学教授、二松学舎大学創立者）、書は日下部東作による。

日下部東作（後に鳴鶴、天保 9～大正 11 年／1838～1922）は、近江国彦根藩士（滋賀県）の田中惣右衛門の次男で、同藩士・日下部三郎右衛門令正の養子となって井伊直弼に仕えた。元治元年（1864）の「禁門の変」では京都守護として在京し、維新後は新政府に仕えながら書家・漢詩人として活躍した。明治 9 年（1876）には、明治天皇の御前で前出の金井之恭とともに席書をする。同 12 年に官を辞して書作に専念したほか、全国の名勝古跡を漫遊して多くの石碑の書を揮毫し、門人を育てた（享年 85）。

・多胡碑記（高崎市吉井町池 多胡碑史跡地）

「多胡碑記」は、細川潤次郎（元老院議官）が上野三碑を訪れた際に、多胡碑の価値、保護の経緯を記したものである。日下部東作の書による均整のとれた隷書が美しい。大正 5 年（1916）1 月建立。

・松田易直碑（高崎市北原町 神明宮近傍）
正面 琴堂松田翁碑（篆額）
東京侍講正五位勲四等三島毅撰 正五位日下部東作書
宮内大臣從二位勲一等伯爵土方久元題額
翁諱易直幼字民之助松田氏號琴堂又景山上野國群馬郡
北原邨人（中略）
明治三十年十二月

⑨神保雪居翁藏碣銘（高崎市金古町）

神保親道（雪居、1809～91）は、群馬郡金古宿の代官の家に生まれ、漢学を保渡田村医師の安中文瑛（ぶんえい）、和歌を橘守部（たちばなのもりべ）・橋本直香（ただか、なおかとも言う）、漢詩を大沼枕山（ちんざん）・鈴木元邦に学んだ。また雪居は、小野派一刀流剣術者としても知られる。

碑は、長年雪居が地域の子どもたちに学問を教授してきたため、門人たちが「壽藏」碑（生前に建てる記念碑）として、その功績を称えたものである。題額（篆額）の「神保雪居翁藏碣銘」は、東久世通禧（みちとみ、天保 4～明治 45 年／1833～1912、公家・政治家）によるものである。また撰文は、重野安釋（やすつぐ、文政 10～明治 43 年／1827～1910、漢学者・歴史家）によるもの、書は、前出日下部東作によるものである。

・神保雪居翁藏碣銘（高崎市金古町）

正面

神保雪居翁藏碣銘（篆額）

鬱蒼者山其山維何榛嶽西峙赤城東摩滉漾者水其水維何南控烏川北環刀河山秀而靈水清而和土厚宅幽碩人在阿耕牧讓畔漁樵謳歌有德有壽豐碑魏巍嗚呼此雪居翁之壽藏也歟翁名親道稱要藏姓神保氏雪居其號又梅守園上野西群馬郡金古驛人也以學德誘掖後進執簪及門者前後三百餘人皆能勉踐履之學不趨利祿之途其嫩言懿行蔚爲鄉黨師表明治己丑國家舉養老之典翁年八十有一賜酒饌若干資翁之德之與壽得於人天者如此翁少時從安中文瑛遊學已通旁修詞章繪事工畫梅其法傳自椿山氏又質和歌於橘守部橋本直香凡四方騷人韻士漫遊過翁居乃欣然晤對尤與大沼枕山鱸元邦等交善其風流儒雅恬於世榮者亦如此（中略）歲庚寅門人相議爲翁圖不朽介堀口藍園乞余以壽藏之銘藍園洪川人亦以學行著與翁咫尺接境竝負一鄉望余豈可以不文辭乃銘而敘之且俾世之奔競者知所歸響焉其門人主斯學者姓名勒於碑隱

樞密院副議長從二位勲一等 伯爵 東久世道禰題額
貴族院議員從四位勲四等文學博士 重野安釋撰

正五位 日下部東作書

明治廿四辛卯七月／井龜泉鐫

⑩神樹碑銘（高崎市足門町 八坂神社）

本碑は足門の八坂神社境内にあった樹齡 1500 年余りの木について、樹心のウロの中で失火し、切り倒すことになったため記念に建てた珍しい石碑である。撰文と書の間庭文莊（文造、静園、文久元～大正 8 年／1861～1919）は、洪川の学者・堀口藍園（らんえん）の門人となり、更に東京専修学校に入学して法律を学んだ。その後、文造は戸長、町長、郡会議員を歴任、地元の製糸業の発展に尽力した。大正 6 年（1917）5 月建立。

・⑩神樹碑銘（高崎市足門町 八坂神社）

正面 神樹碑銘（篆額）

上毛足門邑鎮守八坂神社境内西北隅有巨大老櫟古來稱神樹周圍五丈直徑一丈五尺餘高伴之樹目年輪恰如并絲其樹齡推定千五有年（中略）間庭文莊撰并書

⑪御嶽大権現の碑（高崎市足門町八坂神社）

正面 御嶽大権現／碧山拜書

慶応 2 年（1866）9 月建立

木曾御嶽山を御神体とする石碑で、碑文を記した星野碧山（へきざん、1831～没年不詳）は、高崎城下・本町の薬種問屋の家に生まれた。碧山は書に造詣が深く、法輪寺（高崎市羅漢町）の懸額「正覚門」、頼政神社（高崎市高松町）の手水舎の書、明治 6 年（1873）に養行寺（前橋市三河町）に掲げられた「桃井學校」（現前橋市立桃井小学校・同市大手町）の懸額は碧山によるものである。

⑫ 瑾亭先生墓碣銘（高崎市保渡田町）

安中文瑛（瑾亭、1811～81）は、群馬郡保渡田村の医師の家に生まれた。同氏は立元、立榮、玄祥、文瑛と代々医業を営んだ。文瑛は江戸で幕府医官の多紀家に医学を、朝川善庵に漢学を学び、高崎の鈴木藤陰と交流したという。

碑は、長年文瑛が地域の医療に貢献してきたため、地域の人々が建てたものであるが碑文からは、当時の医師の関係など様々な交流がうかがえる。なお文章を書いた依田百川（学海、天保四～明治四二年／1833～1909）は漢学者・文学者、題額を書いた巖谷修（一六、天保5～明治38年／1834～1905）は、日下部東作（鳴鶴）と並ぶ明治三筆の一人である。

・瑾亭先生墓碣銘（高崎市保渡田町）	正面 瑾亭先生墓碣銘（篆額）	文部權少書記官從六位依田百川撰	修史館一等編修從五位巖谷修題額	安政乙卯歲八月余薄游上毛抵高崎問土人以文雅之士答曰保渡田村有安中文瑛者以醫爲業善詩文溫雅君子也（中略）今茲壬午二月文瑛友人牧野再龍來通謁曰文瑛歿矣（中略）文瑛嘗曰先生余知己也墓碣之文非先生不可嗚乎余於是屈指數與文瑛相晤之日則距今二十八年矣其所囑文未果作余則負文瑛矣墓碣之銘豈得辭乎（中略）君繼箕裘厥業益盛嘗游江戸受業於幕府醫官多紀安□又好學師鈴木藤陰為人溫和資懿竭力施治病者賴之遠近請治者履常盈門嘗讀西洋醫書翻然有所悟曰漢方未精藉此以補可也益究其術方是時西醫之術未大行於世人或以爲怪誕君獨知其可用豈非豪傑之士乎以是門人子弟稍通其術至今效益著嚮爲怪爲誕者後悔無及烏呼是一事足以傳矣君老猷世事遂去保渡田村寓本郡箕輪關叟菴優游歲月以吟咏爲娛以明治十四年七月三十一日歿享年七十一葬保渡田南岡先塋之次（中略）	明治十五年三月正五位 日下部東作書／廣群霍刻字	背面 （箕輪）牧野再龍、（新田郡大根）長山見龍、（浜川）金子廊然、中島養齋	（箕輪）下田連藏、（保渡田）塚越篤太郎、（浜川）中嶋玄碩等一六九名が連名
--------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	--	--------------------------------	--	---

※牧野再龍（幕末維新期の勤皇僧）、長山見龍（新田郡の医師）、金子廊然（浜川来迎寺の僧、寺子屋師匠）、下田連藏（箕輪の文人・有力者）、塚越篤太郎（保渡田の寺子屋師匠）中嶋玄碩（浜川の医師）